

として、広島県立歴史博物館 1995『茶・花香－中世にうまれた生活文化－』の写真 152)。出土地点は、B 2 区包含層である。なお、同区包含層からは、戦国期の土師器皿、天目茶碗、白磁、青磁、青花の他、木製品、鉄製品、青銅製品が数多く出土する。酒井氏によれば、龍形金銅製品は 16 世紀半ばぐらいに比定できるものとご教示頂いた。また、同遺跡 3470 の鶴形金銅製品も、同様に、香炉の装飾の一つの可能性があるとご指摘があった。

また、正式報告は今後であるが、加納谷内遺跡例は青銅製品で、桜洞城跡例・石名田木例に比べ、意匠がかなり省略されている。しかし、前 2 例と共に通るのは加納谷内例も身体をくねらせるポーズを採用しており、共通した意匠であることは容易に想像がつく。

このように、桜洞城跡出土の龍形青銅製品と極めて類似する石名田木舟遺跡例と、そして省略形ではあるが加納谷内例は、同類の意匠をもつ金属製品が分布していることからも、富山と飛騨の物流を考える上で示唆的な出土品である。すなわち、それら金属製品が酒井氏の指摘する「仏具」であり、かつ大名の権威品とするならば、類似する意匠をもつ仏具が分布する範囲から、それ以外の例えは青磁などの貿易陶磁の流入ルートを推定することは無理な話ではない。

桜洞城跡出土の「龍形青銅製品」は権威品としての意義をもち、かつ富山方面との物流ルート及び交流上の強いつながりを考える上で貴重な材料となろう。

第5節 戦国時代の飛騨の大名、三木氏と桜洞城の発掘調査成果

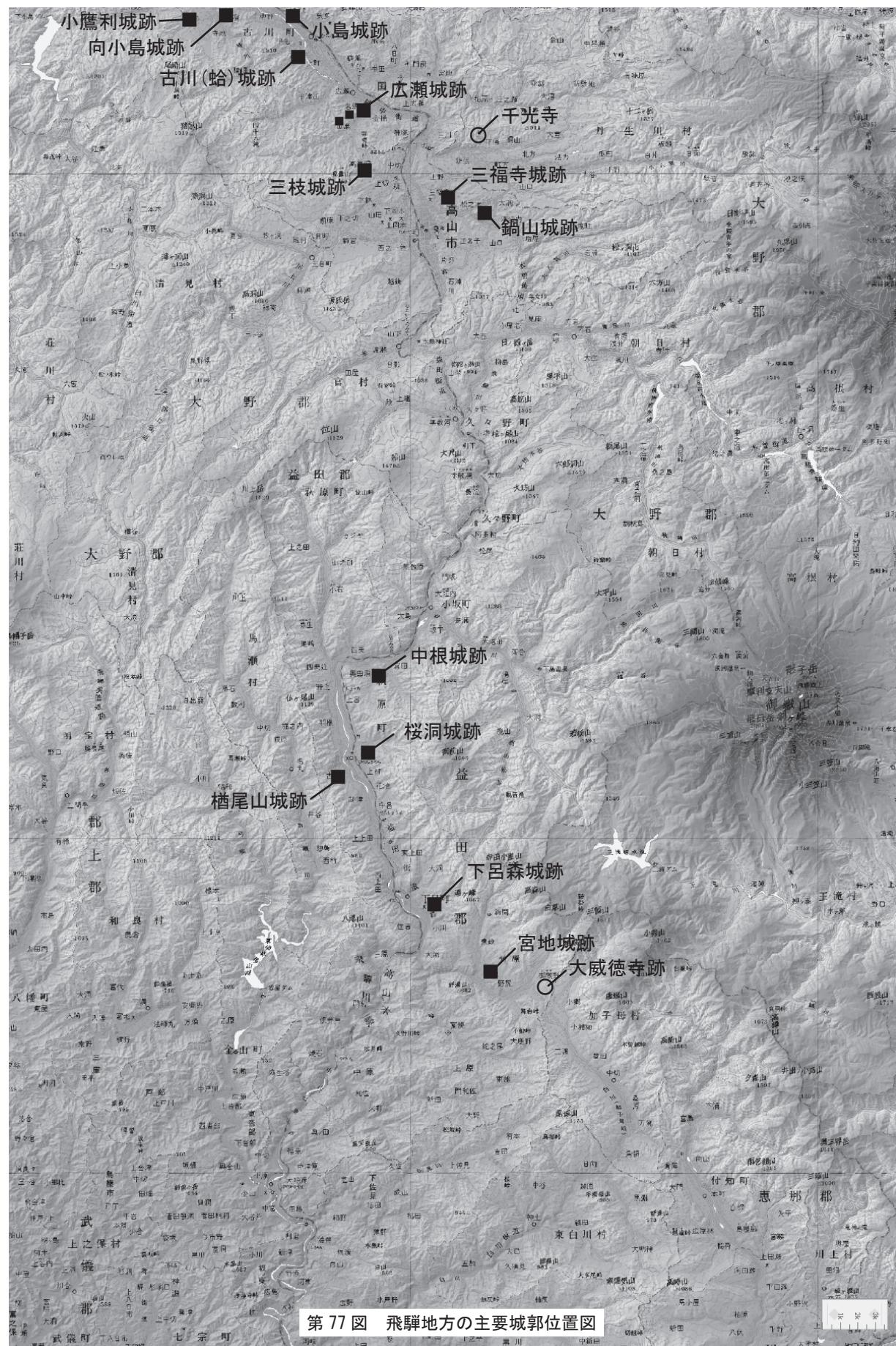
1) 史料による三木氏の動向と飛騨南部の城郭

これまでの文献史から把握できる三木氏の動向について、簡単にまとめてみよう（第 38 表～第 40 表）。

まず、桜洞城築城までの関連史料を点検してみよう。第 2 章第 2 節「歴史的環境」で触れているが、三木氏が飛騨に登場するのは応永年中(1394 年～1427 年)である。飛騨国司姉小路尹綱が起こした乱の鎮圧軍に三木氏初代正頼は加勢し、その論功行賞として飛騨南部の現在の竹原地域（乗政・宮地）を領地とすることができた。寛正年中(1460 年～1465 年)に 2 代目久頼は同地を領地としつつ、現在の下呂市域を含む益田郡を占領したとある。文明 3(1471) 年に久頼は姉小路基綱との合戦で戦死したようであるが（谷口 1986）、勢力は保持したようで、3 代目重頼は益田郡を手中に收めるとともに、現在の萩原町上村（うわむら）に居住したとある。史実に基づけば、三木氏の本拠地は、下呂市域南部の乗政・宮地から下呂市域北部の萩原の上村へ重頼の代に移動する事になる。久頼の死去が文明 3(1471) 年、重頼の死去が永正 13(1516) 年であるため、上村への本拠地移動は 15 世紀後半と推測することができるであろう。

さて、史料において桜洞城の築城が明示されるのは 4 代目直頼の代である。『飛州志』の卷六「桜洞城」には、永正年中に直頼が築城し、5 代目良頼、6 代目自綱まで居住したとあり、同じく「三木氏系図」には、永正・大永(1504～1527) 年間に阿多野郷（現在の高山市朝日の阿多野）や馬瀬郷（現在の下呂市馬瀬）を合戦にて併合し、桜洞に城郭を構え居城したとある。ここに、旧益田郡（飛騨南部）の範囲を直頼は手中に収めたことがわかる。

さて、史料によれば直頼の勢力範囲は飛騨南部に留まらず、高山盆地・国府盆地のある飛騨北部に



第77図 飛騨地方の主要城郭位置図

まで及び、また、享禄元(1528)年には長野県木曽王滝に出張し、木曽占領まで企てていたともある(岡村 1921、166 頁)。大永元(1521)年にはその詳細は不明ながら「大永合戦」が勃発し、高山の三仏寺城に在城していたことが確実であり(谷口 2007、50-52 頁、史料「寿楽寺大般若波羅密多奥書」)、また享禄3年から4年(1530~31年)には姉小路古川氏・同向氏の内紛に直頼が介入し、益田衆が向氏の重臣・牛丸与十郎が立て籠もる忍城を攻略、またその勢いで古川城も攻め落としたことが判明している(谷口 2007、53-54 頁、史料「飛州志所収飛騨一宮水無神社棟札」)。

すなわち、16世紀前半三木直頼の動向を示す史料は、飛騨南部の出来事より、圧倒的に飛騨北部での出来事が多い。『飛州志』の記載に沿えば、桜洞城が直頼の本拠地であったことが読み取れるのだが、その他史料にはむしろ桜洞城以外での動向が頻繁に記されている。

ただし、直頼の本拠地が桜洞城であったと窺わせる記事が天文年間の史料に見られる。その点も触れておきたい。天文元(1532)年に直頼は桜洞城下に果天宗恵のために禅昌寺を創建(再建とも)。果天宗恵の師・明叔慶俊を開山とした(岡村 1921、160 頁)。以後、直頼と禅昌寺との懇意の関係は長期間継続し、直頼が度々禅昌寺に書状を発したことが谷口研語により指摘されている(谷口 1986)。

直頼は、禅昌寺の創建(再建)により、禅宗勢力を三木氏の有力な支援者とともに、「遠交近攻」の手段で飛騨北部と南部の諸勢力を討伐し、領地を併合していく。一方で、江馬氏との婚姻による同盟関係の成立、姉小路氏内紛への介入による同氏への影響力の保持、本願寺との懇意による一向衆勢力との良好関係の構築に腐心し、更には中津川苗木に本拠地を構える苗木遠山氏(遠山正廉)や岩村遠山氏(遠山景前)とも良好な関係を保っていた。天文年間の前半は、こうした同盟関係の構築に特に力を注いでいた。

しかしながら、天文年間の後半には、再び合戦の記事が多くなり、その舞台に飛騨北部が再び登場する。天文8(1539)年9月に郡上郡畠佐兄弟へ合力し郡上衆(東氏か)を討伐し(谷口 1986、史料 II-37)、同9(1540)年に「土岐殿(土岐頼芸か)」に合力し、東美濃の米田嶋城・野上城など3つの城を攻略した(谷口 1986、史料 II-37)。後者の合戦では、姉小路三家・廣瀬・江馬の各勢力からの支援を受けている。ただし、天文8年の合戦では「三木新介」、天文9年の合戦では「三木新九郎」といった三木一族の武将が出張しており、直頼自らの出陣ではない。更には、天文13(1544)年の飛騨で発生した詳細不明の内乱にて、三木新九郎・三木四郎次郎が三仏寺城近くの鍋山へ出張したことがわかつている(谷口 1986、史料 II-19)。

このように、天文年間後半の記事からは直頼自らの出陣ではなく、一族の武将が出張することで事態の收拾を図っていたことがわかる。天文9(1540)年10月に、直頼は一族の領地巡視のため、「古河」・「三枝」・「八賀」に立ち寄っている。谷口は、大永合戦の際の拠点になった三仏寺城を「八賀」に、現在の三枝城付近あるいはその一帯を「三枝」と推定し、直頼の代における飛騨北部の前線基地と両城・両地域を考える(谷口 2007、89 頁)。また、天文15(1546)年に、現在の丹生川にある千光寺を直頼は再興する(谷口 1986、史料 II-40)。直頼は千光寺を、飛騨北部にて三木氏の守りを固める勢力として考え、支援したのであろう。

このように、直頼は、桜洞城に自らの拠点を構えつつも、周辺勢力の動向を監視するため、高山盆地の「八賀」と「三枝」に飛騨北部前線基地としての城(砦)を配置し、また同盆地の東の千光寺、また西方の照蓮寺といった寺院勢力を味方にすることで飛騨全体の動勢を見守っていたというのが実

態に近いのであろう

ただ、三木氏の飛騨南部の前線基地はどこであったのか、という点については、不明瞭な点が多い。現在の下呂市内には、小川にある下呂森城、宮地にある宮地城がその可能性として指摘できるところであるが、それら城郭の由来については確固たる当時の史料があるわけではなく、伝承程度に留まる。また、佐伯哲也氏による縄張り調査の所見では、下呂森城跡が16世紀後半頃とある（佐伯2005）。直頼の代では中津川市界隈を領地としていた遠山氏と友好関係にあったため、軍事的緊張もなく、敵方を監視するような城郭の設置も進まなかつたのであろう。

しかし、天文23(1554)年の直頼没後、良頼の代に情勢は一変する。天文年間末に勃発する武田氏と長尾（上杉）氏の著名な抗争「川中島の戦い」は、弘治元(1555)年に第二次の抗争が発生し、その影響は飛騨にも及んだ。武田氏、上杉氏の策略により江馬氏は内部分裂し、三木氏は上杉方に合流した。一方、苗木遠山氏は遠山直廉が武田方の扇動によって三木氏の攻略を窺っていた（千早2008）。情勢は、上杉方に三木良頼と江馬輝盛、武田方に江馬時盛と遠山正廉という勢力図へと変化し、また武田方には本願寺勢力が加勢しているため、良頼は東に武田、南に遠山、西に本願寺勢力といった各勢力と敵対しなければならなかつた。そのため、飛騨南部に前線基地を設けるとすれば、三木氏と遠山氏の緊張が極度に高まつたと考えられる永禄年間(1558～1569年)がふさわしい。

だが、それに相応する城郭は現在不明瞭である。筆者はむしろ、飛騨南部には当時機能していた城郭がなかったのではないかと考えている。それは、「威徳寺合戦」で衰退・荒廃した大威徳寺跡を合戦場として使用している点に注目するからである。「威徳寺合戦」の年代は記録により諸説あり一定しない。だが、元禄7(1694)年の史料（村瀬1886、史料II・89）の「飛州乱逆之時分賊徒等焼払申由」という記述や、遠山家文書『高森根元記』、同文書『御家譜』（千早2008）など複数の史料に、大威徳寺跡が合戦場になったことが明示されている。千早氏は、「威徳寺合戦」の有力年代を遠山直廉が死亡した元亀3(1572)年と考えるが、筆者は『高森根元記』が示す永禄年間も、先述の三木・遠山の極度の緊張関係の高まりから、「威徳寺合戦」の候補の一つから完全に消去できないのではないか、と考える。

さて、桜洞城の終末期を示す史料も、ここで合わせて紹介したい。『斐太後風土記』によれば、天正7(1579)年に高山に松倉城を築城した三木自綱は、長子宣綱を桜洞城城代にしたと記述する。また、天正13(1585)年に、豊臣秀吉から三木討伐の命を受けた金森長近は、可重に益田郡方面の攻略を任せ、同年8月に数日もかからずうちに桜洞城を陥落したとある（谷口2007、211頁）。また、関ヶ原の合戦の際の慶長5(1600)年に、西軍側として三木残党を率いたと考えられる三木次郎兵衛（自休）が「萩原城」に立て籠もつたとあり（岡村1921、231頁）、それが桜洞城の可能性もある。しかし、「萩原城」は「萩原諒訪城」の可能性もあるため、桜洞城としての確実性には乏しい。そのため、史料に見る桜洞城の城郭としての機能停止は、とりあえず天正13年と見てよいであろう。

このように、桜洞城と飛騨南部の城郭を取り巻く戦国大名の動静を整理した。次に、そうした動静を踏まえながら桜洞城の発掘調査成果を検討してみよう。

2) 発掘調査成果から見た桜洞城とその廢城

これまでの検討の結果で判明した内容をまとめておく。今回の発掘調査にて空堀・城内から出土し

た大窯製品の大半が大窯第1段階・第2段階という大窯前半期にほぼ限られていた。16世紀初頭から前半の永正年中築城という、史料が示す桜洞城の築城とほぼ近い結果を得たことになる。

次に、廃城ないしは機能停止の時期については、出土遺物の年代から遅くとも16世紀中と考えてよいであろうか、それ以上の絞り込みについては不明遺構001が鍵を握る。本報告書では、意図的な「埋め立て」地として判断される不明遺構001が16世紀第2四半期中に埋め立てられた可能性を推定した。しかし、大窯製品の生産年代をそのまま消費地の年代に適用する危うさを指摘する声（鈴木2001）もあり、単純に年代を割り出すことに躊躇を覚える。ここで年代の結論を出すのは早計であるのかも知れない。

ただ、不明遺構001出土品には貿易陶磁や茶器という三木氏の権威を示す品々が集中しており、その遺構付近に、三木氏屋敷の「主殿・会所」といった権威の空間が存在したことを推定させる。残念ながら、こうした空間を示す遺構を検出することはできなかったが、貿易陶磁や茶器が碎片に至るまで「壊された」異様な状態で出土が確認された不明遺構は、桜洞城跡の廃城と密接にかかわる事象と考えられる。

すなわち、不明遺構001にて確認できた、「壊された」三木氏の権威品に象徴される権威空間の機能停止は、桜洞城跡の廃城時期とも重なる事象と考えられる。仮に、不明遺構001の出土遺物の年代をもとに桜洞城の「廃城・機能停止」を16世紀半ばと考えた場合、三木氏4代目の直頼が没した天文23年（1554）とも限りなく近い。また、桜洞城跡から出土した古瀬戸・大窯製品の組成は、内堀氏のIII期（1535年頃から1552年頃）とも一致する。

なお、禅昌寺の僧明叔慶俊が遺した「明叔録」によれば、直頼没後の翌年には、「飛騨国錯乱」とあり、直頼の影響力が弱まることで国内になんらかの混乱があったことが考えられる（谷口2007）。また、その後の永禄年間は信州から武田氏にたび重なる侵略を受けており、高山盆地は相当な緊張状態にあったことが推定される。残念ながら5代目、良頼の本拠地が桜洞城であるのか、あるいはそれ以外の場所にあったのかを示す史料はない（注1）。ようやく6代目自綱の代の天正7（1579）年に高山の松倉城を築城したという記録が『斐太後風土記』に登場するが、わずか1史料であり、その確実性には課題が残る。

ここでは、直頼没後から松倉城築城が推定される天正7年頃までの間の、少なくともおよそ25年間、桜洞城以外に三木氏の本拠地が置かれていたという推定が可能性のあることと触れて、本発掘調査報告書の終わりとする。

注1）三木良頼が桜洞城城主であった可能性を示す史料に、渡邊謙一郎氏所蔵文書（『岐阜県史』史料編古代中世補遺）がある。享禄元年（1528）9月11日付と考えらる箱ウハ書史料だか、次の点において、城主「良頼」と考えるには難点がある。自綱生誕の天文9年（1540）を基準に生誕年不詳の良頼の年齢を考慮すると、享禄元年に良頼はまだ10歳にも満たない年齢の可能性がある。そのため、箱ウハ書の内容をそのまま受け入れることは難しい。

第38表 三木氏主要事件年表①

西暦	年号	三木氏 当主	内 容	出典
1394～1427	応永年中	正頼	三木忠右衛門正頼、竹原郷に京極氏の代官として領す。	「三木氏略系」『飛州志』
1411	応永18		応永飛驒の乱。姉小路尹綱・広瀬常登入道と飛驒守護京極氏、信濃小笠原氏、越前斯波氏被官朝倉氏が合戦。尹綱戦死。	
1412	応永19		白井太郎利國が久津八幡宮再興。	久津八幡宮棟札(『萩原町誌』)
1460～1465	寛正年中	久頼	三木右京進久頼、竹原郷に住す。寛正年中に益田郡刈り取る。	「三木氏略系」『飛州志』
1471	文明3		8月、美濃国守護代斎藤妙椿が姉小路基綱に書状送付。「去る七日三木討死」。	「国華余芳」(斎藤妙椿書状) 『飛驒下呂』史料II・18-1
1504	永正元	重頼	7月、飛驒国三木重頼、数百の兵を率いて加子母から白巣峠をこえ木曾谷の木曾氏を攻めた。	「木曾考」
1516	永正13		三木重頼死去。「前匠作樋山春公大禪定門 永正十三年丙子二月二日卒去」。なお、重頼妻「景劉院開基笑庵樋山公尼首座」。	「禪昌寺所蔵三木重頼位牌」 『飛州志』
1504～1527	永正～大永 年中頃	直頼	この頃三木直頼(大和守・初名右衛門尉)、阿多野郷・馬瀬郷を併合。桜洞城を築城。	「桜洞城跡」・「三木氏系図」 『飛州志』
1521	大永元		大永合戦の年。直頼、高山の三仏寺城に在城。	「寿楽寺大般若波羅密多經奥書」 『飛驒下呂』史料II・1-37
1528	享禄元		桜洞城主三木直頼、龍澤山禪昌寺を再興。明叔慶俊を再興第一世とする(飛州志)。 7月、飛驒の兵(三木か?)、木曾谷王滝へ侵攻する。木曾義元と合戦になり、傷がもとで木曾義元死去。	『飛州志』 『飛驒編年史要』166頁
1530	享禄3		姉小路古川氏内部にて騒乱。広瀬へ退却。	「飛州志所収飛驒一宮水無神社棟札銘」『飛驒下呂』史料II・1-39
1531	享禄4		姉小路氏牛丸與十郎志野比に立て籠もるもの、益田衆(三木)が攻め落とす。続いて3月古川城も落城。4月に両小島(小島時親・向宗熙)を礼のため訪問。	「飛州志所収飛驒一宮水無神社棟札銘」 『飛驒下呂』史料II・1-39
1532	天文元		三木直頼、益田郡桜洞城下に杲天宗恵のために禪昌寺を創建し、杲天宗恵の師明叔慶俊を推して開山となる(編年)。	『飛驒編年史要』169頁
1540	天文9		1月に三木良頼の初室、江馬氏娘死去(明叔録)。法号は「月江宗光大禪定尼」。 8月に三木新九郎、「土岐殿」(土岐頼芸か)に合力し、東美濃米田嶋城・野上城など三つの城を落とす。姉小路三家・廣瀬・江馬から兵の支援を受ける。新左衛門尉直弘が祈祷する。 10月、木曾殿より馬が届く。また岩村殿(遠山景前)より大魚十匹が届いたが、皆腐っていた。また岩村より来たふちかけ瀬戸物はとても貴重なものであった。出来次第、人を使わすと禪昌寺仁谷に申し出る。 10月、三木直頼、古河・三枝・八賀を巡視する。	『飛州志備考』24頁注37 「寿楽寺大般若波羅密多經奥書511卷」 『飛驒下呂』史料II・37 「飛州志所収禪昌寺文書」 『飛驒下呂』史料II・1-6 「飛州志所収禪昌寺文書」 『飛驒下呂』史料II・1-7
1541	天文10		12月、本願寺証如、越中勝興寺・瑞泉寺・照蓮寺・聞名寺等と入魂に預かりたいとの三木直頼の申し出に、申し下す旨の返答をする。また、この年より「三木大和守」が古文書にあらわれる。	「証如上人日記」 『飛驒下呂』史料II・41
1544	天文13		3月、三木新九郎・四郎次郎が三仏寺鍋山まで出張する。直頼は八賀衆の意を汲んで出兵せず。越中衆も出兵したとは噂であった(谷口研吾氏は「天文十三年の乱」と呼ぶ)。	「飛州志所収禪昌寺文書」 『飛驒下呂』史料II・1-19
1546	天文15		春、三木大和守直頼、高山の千光寺を再興(梵鐘)。5月、江馬左馬助時経死去(編年)。11月、三木右兵衛尉良頼(大和守子也)が上洛、本願寺訪問(証如)。	「千光寺梵鐘陽銘」『飛驒下呂』史料II・40、「証如上人日記」『飛驒下呂』史料II・41
1554	天文23		6月、三木直頼57歳にて死去(明叔録)。禪昌寺殿前和州太守徳翁宗功大居士。10月、後奈良天皇の時代、廣橋国光、禪昌寺仁谷へ禪昌寺に十刹の縁旨を下す(編年)。	
1555	弘治元	良頼	8月、長尾景虎、信州川中島出陣(第2次川中島の合戦)につき、朝倉宗滴(教景)、加賀本願寺勢力を攻撃。また陣僧を上杉陣へと派遣。その際の越中境までの路取次を良頼に依頼する。 10月、飛驒国錯乱(明叔録)。	「禪昌寺明叔録所収文書」 『飛驒下呂』史料II・7-1、34-1
1556	弘治2		3月、姉小路三家にて内紛か(一族)。9月、禪昌寺仁谷寂。	「禪昌寺諸僧法語」『飛驒下呂』史料II・34-1
1558	永禄元		1月、三木良頼、従五位下・飛驒守を叙任(一族)。 6月、武田晴信、飯富・甘利・馬場の将をもって飛驒東辺に派兵(編年)。 10月、麻生野右衛門大夫(時経息子)、武田信玄に通じる。この年、三木光頼、飛驒国司を任せられる。	「歴名士代」『飛驒下呂』史料II・47 『甲陽軍艦』、「武田信玄修驗脇田大成院蔵文書」『飛州志』274頁、「お湯殿上の日記」『飛驒下呂』史料II・45
1559	永禄2		8月、木曾義康、武田晴信の命で兵を飛驒阿多野に進める(編年)。	

第39表 三木氏主要事件年表②

西暦	年号	三木氏 当主	内 容	出典
1560	永禄3	姉小路 良頼	三木良頼・光頼、姉小路姓を下賜され、良頼は従四位下、光頼は従五位下 左衛門佐を任じられる。	「歴名土代」『飛騨下呂』史料II・47
1561	永禄4		3月、上杉憲政から家督・関東管領職を譲位され、名を上杉政虎とする。 7月、上杉政虎、川中島に兵を進め、第4次川中島の戦いが勃発。それに応じて、江馬時盛が武田に応じて兵を挙げるが、三木良頼・江馬輝盛之を討つ(編年)。 12月、上杉政虎、足利義輝の一字を賜り、上杉輝虎と改名。	
1562	永禄5	良頼 (嗣頼)	2月、三木良頼、従三位を叙任され、嗣頼と改名する。12月、嗣頼、中納言の叙任を望むも却下される。	「公卿補任」『飛騨下呂』史料II・48
1563	永禄6		越後上杉の将、河田長親、越中より飛騨に兵を入れる(編年)。	
1564	永禄7		7月、武田信玄、上諏訪神社に戦勝祈願し、飛騨に侵攻(史考234頁)。千光寺、武田軍により焼失する(千光寺棟札)。 8月、第5次川中島の合戦。 8月、山村三郎九郎、檜田次郎左衛門尉を討ち取る。	『信濃史料』・『国府町史』資料編I 『山村文書』
			10月、越後河田長親から江馬輝盛家臣河上中務丞に書状。江馬時盛は武田方に組みし、三木良頼・江馬輝盛は上杉輝虎方に付き、合力して高原を攻撃。上杉は川中島に出陣し(第5次川中島の戦い)、約60日間、武田軍を牽制した。	『河上文書』(史考235頁)
1565	永禄8		6月、飯富昌景、高原を越えて越中新川郡に出て、椎名康胤を攻撃し、之を降す。中山地城を江馬の将河上中務に守らせる(編年)。	
1567	永禄10		5月、武田信玄、飛騨高原を越えて越中国境を巡視し、攻撃に備える(編年)。	
1568	永禄11		12月、武田信玄、駿河に出兵。今川氏真掛川城に逃走(編年)。	
1569	永禄12		2月、上杉輝虎、塩屋筑前守を介して、三木良頼に各地の情報を伝えるよう打診(史考255頁)。三木良頼・輝虎・直江大和守・村上国清に椎名康胤不審のこと等を伝え、信玄・信長・京都の様子を伝達。 2月、三木良頼、反目する康胤と輝虎の調停役を買って出るが、不調に終わる。	「上杉家文書」・「村上文書」 『飛騨下呂』史料II・19・28、 『飛騨下呂』史料II・23
1570	元亀元		織田信長、1月に諸大名に上洛を促す。3月、信長上洛。姉小路中納言上洛。12月、上杉輝虎、謙信を名乗る。 この年、上杉・北条の同盟成立。北条三郎、上杉謙信の養子となり上杉景虎を名乗る。	「信長公記」『飛騨下呂』史料II・46
1572	元亀3		3月、自綱の子親宜が従五位下に叙位され、同日宣綱と改める(一族)。 10月、直江景綱・河隅忠清・飯田長家の三名が吉江喜三郎に宛てた書状に、三木良頼がようやく参陣するとの記述あり。 10月、上杉謙信が関東の河田伯耆守に宛てた書状に、良頼病中のため子自綱が上杉の陣に参上するとある。 11月12日、三木良頼没。	「上杉家文書」『飛騨下呂』史料II・19-3 『賜蘆文庫文書七村上文書』『飛騨下呂』史料II・26-1
1573	天正元	自綱	織田信長の命で三木自綱が郡上に侵攻か。 4月、武田信玄没。9月、自綱の兄弟、鍋島豊後守(頸綱)に武田信玄・勝頼書状を送る。自綱討伐を決し、雪溶けをまって出陣する。自綱変節するとも頸綱変節なきこと祝着(一族)。	「千光寺大般若經奥書」『飛州志』 『松雪公採集遺編類纂』 『飛騨下呂』史料II・30-1
1575	天正3		5月、長篠の合戦。織田・徳川軍に武田軍破れ、多数の重臣を失う。	
1577	天正5		2月、岡本豊前守夫妻、自綱により殺害される(編年)。9月、上杉謙信、加賀手取川にて織田の將柴田勝家の軍勢を破る。	
1578	天正6		3月、上杉謙信没。	
1579	天正7		この年、自綱、松倉城築城。桜洞城城代は子宣綱(風土記)。また安土城完成。2月、宣綱、父自綱により殺害される(編年)。6月、高原合戦で江馬氏を破る。	「船坂文書」『飛騨下呂』史料II・8
1580	天正8		桜洞城の改築(風土記)。	
1581	天正9		自綱、久津八幡宮拝殿を造立。	「久津八幡宮拝殿造立棟札銘」 『飛騨下呂』史料II・38

第40表 三木氏主要事件年表③

西暦	年号	三木氏 当主	内 容	出典
1582	天正10		3月、信長の将柴田勝家、魚津城の上杉軍を包囲。 3月11日、織田信長に攻められ、武田氏滅亡。 6月2日、本能寺の変で信長死亡。 9月か10月、荒木八日町の合戦で、自綱・姉小路向氏連合軍が江馬輝盛を討つ。自綱、家臣船坂又左衛門に感謝状を発する。	「寿楽寺大般若經奥書」『飛驒下呂』史料II・37、「船坂文書」『飛驒下呂』II・8-3
1583	天正11	秀綱	9月、自綱、実弟鍋島豊後守頼綱を殺害。また、広瀬宗城との共同作戦で小鷹利の牛丸綱親を討つ。さらに同月、自綱は広瀬氏を滅ぼす。秋、子秀綱に家督を譲る(史要)。この年、秀吉、本願寺跡地に大阪城着工。	
1585	天正13		8月、秀吉、北陸に出陣。佐々成政降伏。金森父子が自綱を攻撃し、三木降伏。秀吉、稻葉勘右衛門重通を飛驒国に封じる。 ※金森飛驒攻撃に関することは、「金森飛州討入之事」・「三木防戦松倉落城之事」『飛州志付録』に詳しい。 11月、大地震で内ヶ島氏居城帰雲城が崩壊、埋没する。	「宇野主人日記」『飛驒下呂』史料II・42

※(飛州志) :『飛州志』、(編年) :『飛驒編年史要』、(一族) :『飛騨三木一族』、(風土記) :『斐太後風土記』、(明叔錄) :明叔慶俊和尚語錄
(史考) :『飛騨史考』中世編

参考・引用文献

- 井川祥子 1997 「15世紀後半から16世紀前葉の土師器皿－中濃地域を中心として－」『美濃の考古学』第2号、125-140頁。
 井川祥子 1998 「美濃における中世後期の土師器皿」『第17回中世土器研究会報告資料－京都系土師器皿の伝播と需要－』、16-23頁、中世土器研究会。
 蘆田伊人編 1930 『大日本地誌体系』斐太後風土記上・下、雄山閣。
 岩田修編 1984 『萩原の風土と生きもの』萩原町教育委員会。
 上田秀夫 1982 「14世紀～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2、55-70頁。
 内堀信雄 1998 「考古資料から見た16世紀代の美濃(1)」『橘崎彰一先生古希記念論詩文集』、278-287頁。
 大前久八郎 2002 「明叔慶俊和尚語錄」『萩原町史』第1巻、自然・原始古代・中世編、397-611頁。
 大藪海 2011 「北朝・室町幕府と飛騨国司姉小路氏」『姉小路と廣瀬』、114-123頁、姉小路家・廣瀬家特別事業実行委員会。
 岡村守彦 1979 『飛騨史考』中世編。
 岡村守彦 1986 『飛騨史考』近世編。
 岡村利平編 1909 『飛州志』、住伊書店。
 岡村利平 1921 『飛騨編年史要』、住伊書店。
 岡村利平編・上村木曾右衛門満義著 1917 『飛騨国中案内』(復刻版1987、かすみ書房)
 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2、71-87頁。
 小野正敏 1997 「城下町、館・屋敷の空間と権力表現」『国立歴史民俗博物館研究報告』第74集、165-175頁。
 桐山力所編 1979 『飛騨遭乗合』、住伊書店。
 小淵忠司ほか 2011 『三枝城跡』、岐阜県文化財保護センター調査報告書第116集。
 佐伯哲也 2005 「下呂市」『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第4集(飛騨地区・補遺)、138-149頁。
 酒井重洋編 2002 『石名田木舟遺跡発掘調査報告書』、富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書第14集。
 鈴木正貴 2001 「尾張の拠点城館遺跡出土の瀬戸美濃窯陶器－時期別組成の分析を中心に－」『研究紀要』第2号、51-66頁、愛知県埋蔵文化財センター。
 鈴木康之 2002 「中世土器の象徴性－「かりそめ」の器としてのかわらけ－」『日本考古学』第14号、71-88頁、日本考古学協会。
 角竹喜登 1937 「桜洞城跡」『岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第6輯。
 谷口研語 1986 「三木氏関係史料」『飛騨・下呂』史料II、1-67頁。
 谷口研語 2007 『飛騨三木一族』、新人物往来社。
 千早保之 2008 「威徳寺合戦考」『苗木遠山史料館レポート』、1-7頁。
 富山正明・清水孝之 2012 『諫訪間興行寺』、福井県教育庁埋蔵文化財センター。
 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006a 「加納谷内遺跡」『とやま発掘だより－平成17年度発掘調査速報－』
 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006b 「(6) 加納谷内遺跡」『平成17年度埋蔵文化財年報』
 中井淳史 2002 「土器の名前－中世土器の器名考証試論－」『日本史研究』第483号、1-36頁。
 村瀬圓良 1986 「宗教」『飛騨・下呂』史料II、69-322頁。
 広島県立歴史博物館 1995 『茶・花香－中世にうまれた生活文化－』
 藤沢良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯、53-175頁。
 藤沢良祐 2007 「編年表」『愛知県史』、別編2、窯業2、中世・近世瀬戸系、766-793頁。
 馬淵和雄 2001 「鎌倉・今小路日(御成小学校内)・北谷3面焼土層下」『季刊考古学』第75号、50-51頁、雄山閣。
 森田勉 1982 「14世紀～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2、47-54頁。
 森達也 2000 「宋・元代竜泉窯青磁の編年の研究」『東洋陶磁』第29号、77-103頁、東洋陶磁学会。
 森達也 2001 「韓国・新安沖沈没船遺構－青磁－」『季刊考古学』第75号、52-53頁、雄山閣。
 森達也編 2012 『日本人が愛した中国陶磁 龍泉窯青磁展』、愛知県陶磁資料館。
 森本一雄 1987 『定本・飛騨の城』